

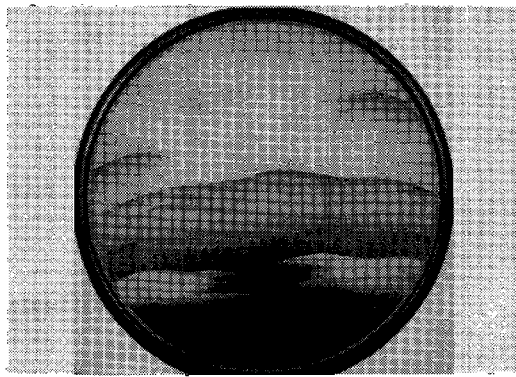
日野稲門会報

第6号

日野稲門会局
事務

清水方
日野市豊田4-37-12
☎0425-86-7798

横山大観・下村観山「明暗」



早稲田大学蔵

ご挨拶

日野稲門会会長 千田 吉郎
今年の夏は、東北地方の地震、台風の被害及び酷暑に見まわれ、日本を離れて生活を楽しまない位です。

さて、前会長故佐藤正和先輩は大変応揚で誠実なお方で、学園に対しても協力を惜しまない早稲田マンです。生存していたならば何時までも会長として、ご活躍をお願い致した

い先輩で誠に残念でした。

先日の幹事会に於て次期会長に推薦されましたが、私自身はそのうつわでないような気が致しますが暫く体力にも自信があり、皆様

の要望に添えてご奉仕致したい所存であります。役員の方々及び会員の御指導、御教示を賜りますようお願い申上げる次第です。

校友会は、大隈老公の建学の精神を、心に秘め、母校のため、地域、職域社会の文化の向上のため実践して行くのが主旨であろうかと思ひます。従つて会員相互の理解と心豊かな親睦をはかりたいと念願するものであります。

あり、誠実あり常にありかとうと人を愛した立派な人生を送った幸せな方です。

告別式の最後、お別れするとき、奥様が自分の頬をあてがって永いことありがとうありがとうと感謝をしてお別れしている姿を見て、私も胸にこみあげる思いで帰宅致しました。

合掌。

講演

「司法界のよもやま」

弁護士 山田 裕四氏

私は弁護士となつて今年で丁度三十年目になりました。弁護士界の歴史は約百二十年です。その四分の一を過ごしたこととなります。その間、貧乏弁護士としてテニスに明け暮れ、また、喧嘩弁護士としてこの三十年を過ごしてきたというのが実感です。

私は郷里、山梨県清里の高校を卒業後、上京して税務署に就職しました。そして税務講習所に通うかたわら、第二政治経済学部経済学科に通学しました。

二年後に税務署を退職してからは育英会より奨学金を貰いながら勉学し、昭和三十一年に早稲田を卒業しました。

司法試験には十年間落第を繰り返しながら昭和四十二年にやっと弁護士資格を取りました。

弁護士の活動としましては京王自動車の顧問弁護士として、十五年間交通事故専門に携わりました。

また、建築関係、主として日照権問題に取り組み、刑事では、死刑廃止論者の正木アキラ先生のカバン持ちをやりました。

さらに国選弁護士としては、二、三年の間に約五十件の事件に携わりましたが、どちらかという刑事事件は得意ではありません。

今日は「法曹界のよもやま」ということで少々お話をしたいと思います。

ただ今、法曹界の問題点としましては、先ず真つ先に弁護士の数が足りないということです。これには、そもそも裁判官の人数が少ないことに問題があります。

現在裁判官は全国で約五千人に過ぎません。そして、弁護士は同じく一万七千人しかおりません。最高裁にいたっては、裁判官がたったの十四人で、現在、1人平均四百件の事件を受け持っており、まことに過酷な重労働を強いられているのが実状です。

では増員すればいいではないかということですが、そういう声があったくあがつて来ないところが不思議です。それどころか事務官

を増やそうという話すらありません。

裁判官や検察官の方で五十歳代でなくなる方が多いのは、このような苛酷な仕事の状況に原因があるものと思われまます。

しかし、次のような改善案があることはあります。

一、最高裁では憲法問題のみにしぼる。
二、事実の認定については一、二審にまかせること。

三、増員につきましては次のように段階的に増やすことが考えられます。

- ① 五百名増
- ② 七百名増
- ③ 一千名増

それでも外国に比べますと未だ十分の一にもなりません。

四、三十万円以下の罰金刑については即決(一日で判決)で行なうことが提案されています。

五、裁判官には弁護士を経験し、五十歳を過ぎた者を就任させる。

これは、裁判官は一般の人と比べますといわば「隔離」された状態で生活しておりますので、どうしても一般常識に欠ける面を多く持たざるを得なくなるからです。

次にオウムの問題につきましては、相手は平例え極悪犯であったとしても、法の前には平

等という憲法の立場から私選または国選の弁護人がついて、きちっと適正な裁判を行なわなければならない。

死刑につきましては私は廃止の立場をとっております。

その理由としましては、

第一に死刑を行なったとしても、ではそれによって犯罪を防止出来るかというところ、その効果はまったく不明だからです。

第二に死刑執行後「真犯人」が現われた場合一体どうするのかという問題です。

第三に死刑は国家という名のもとに行なう「殺人」ではないかということ。

現在、国連でも死刑廃止を採択しており、今や死刑廃止は世界の大勢となりつつあるということがいえます。

命は全地球よりも重いということが合憲とされていますが、「死刑」はこのこととまったく矛盾することはいえましよう。

次に離婚の理由について申し上げます。

一、別居して五年経過しますと離婚成立という判決が出ています。

二、回復したい精神病ということについては離婚理由から削られました。

これはバックアップ体制がないのにおかしいではないかということからです。

財産相続につきましては、遺言を書く他に手はありません。

遺言書を作成するにあつては、次のようにすることが肝要です。

一、相続割合はありますが、何を誰に相続させるのか特定化することが重要です。

二、遺言の執行人を指定しておく法的に強いということがいえます。

三、自筆遺言とし、年月日を記入し印を押捺します。

四、公正証書遺言

五、特定物を変更するときは、自筆遺言とします。

なお、法律相談は「八王子法律相談所」へどうぞお気軽にご相談ください。

場所は二十号にそったトクア本社ビルにあります。相談料は三十分で五千円ですが、更に弁護士も紹介してもらえます。現在まで約四千件の相談を受けました。そして約三千件の紹介実績があります。

校歌 “都の西北” で当選



「年をとると昔の話をしたがる」とよく言われるが、三十年代前の想い出を書きことにする。

昭和42年、私が50

才になった年である。当時私は日野市の商工会の工業部長をやっていた。そして四年に

一回の市議会議員の選挙に当る年であった。市内の工場の皆さん、当時住んでいた地域の

多くの方に推され「是非立候補してくれ」と言われ私も五十になったら何か人様のお

役にたちたいと思っていたので、立候補を決意した。

当時は、議員定数は三十名、日野市の人口は三万五千人位。投票率六割とみて二万一千

票当選するには七〇〇票を集めなければいけない。工業会、地域(日野台)では多少知ら

れていても一般市民の方にとっては無名の新人である。

どうするか?どうして票を集めるか?それが先ず問題である。当時議長をされていた商工会長の和田七郎氏に選対委員長を御

願ひし心よく引受けて頂き、次は運動員である。

当時は告示になると六〇〇枚のポスターに証紙を張り、それを市内に張ることが許されていた。今の様に特設掲示板のみではない、

ベニヤ板にポスターを張り脚をつけ、市内の目につきやすい所に立てるのである。

若い人の手がどうしても必要になる。地域の方だけではどうしても手不足である。

そこで思いついたのが早稲田の学生である。学生時代、千田君も後輩であるが体操部

の選手をしていた私は友人の当時の監督に十名の学生の派遣を依頼した。丁度春休みになる二月末から三月の始めですぐ十名を選挙期間中練習を休みにして派遣してくれた。

いざ選挙に入ってみると結構ピラに関心をもつ人がいて、

「この人、早稲田の理工科卒で海軍少佐だ」などと私のポスターに見入っている人もいた。当時は日野の議員は農業をやっている人や、大会社の労組の人達が多く、大学出は、三人であった。しかし新開地として知識階級の人も増えつつあった。

「コレタ!!」と思い市内を「選挙カー」で廻るときに自分の名前の連呼の間にまげて「都の西北」の校歌を流した。そして九五〇票という新人としては高得票を得て当選。以後二期八年間、日野市議会議員としてお役をさせて戴いた。

(15年・電) 杉山 巨

日野と新撰組 (二)

佐藤彦五郎と土方歳三

日野市史編集委員 谷 春雄

嘉永二年近藤周助に入門した佐藤彦五郎は、日野宿の名手下佐藤家に文政十年生れた。彦五郎は、父が早死し若い頃から名主職を勤めていたが、天然理心流に入門すると、

職務以上に剣術修行に熱中した。師の周助が一年に数回、一村に二、三日逗留して剣術を教授する巡回稽古は、各地の名主や農家の広い庭や物置を片付けて行なわれたといわれるが、彦五郎は自宅の長屋門の一部を四間半四面の道場とし、雨天、夜間でも稽古を続け

嘉永七年には周助から免許を授けられていた。この彦五郎に触発された入門者も多く、安政五年には鎮守牛頭天王社に、宿内の同門者二十三名の名を連ね剣術上達を祈念する額を奉納している。額は櫂の一枚板で横九十

厘、縦五十厘ほどの小さなものだが当時の人々の気魄がうかがえる。

この佐藤家と、土方歳三の生家土方家とは旧くからの因縁関係があり、彦五郎の母は土方家から嫁入りした人で、佐藤彦五郎と土方

歳三は従兄弟の關係にあり、のちに歳三の姉のぶが彦五郎に嫁したので義兄弟の關係にもなる。

この土方家は日野宿から二キロ程の石田村(現日野市石田)にあり帰農武士と伝えられ

代々隼人と称し「義」の字を頭にした諱を用いている。

土方歳三は天保六年五月、土方隼人義諱の

四男として生れた。父義諱は歳三の生前に病死し、母於津津も歳三三才のおり没し、歳三は兄隼人義嚴(嘉永)夫婦に養育された。この頃の石田村は戸数十二、三軒で、村全

体が土方性で、歳三の生家は「大尽」と通称

されていた。この大尽土方家は宝歴の頃多摩

川の深淵に住んでいた河童明神から製法を伝授されたと伝えられ、打身、くじきに特効があるといわれる「石田散葉」を製造販売していた。

歳三は十一才のおり将来自立のため、江戸上野広小路伊藤松坂屋へ丁稚奉公に出された。しかし生来の気性の激しさからか、番頭にさからい夜中生家へ逃げ帰ってきた。

また十八才のおり江戸へ奉公に出たが、奉公先の女中と恋愛事件を起し帰郷している。その後の歳三は、家業の石田散葉を売り歩かたわら、姉の嫁ぎ先である佐藤家へ足繁く出入し、佐藤家の道場へ時折剣術指南に来る

近藤勇と近づくようになった。この土方歳三が何年頃から剣術修行を始めたか詳かでない。三鷹市竜源寺に残る近藤周助の神文帳(入門帳)には、歳三の入門は安政

六年三月と記されている。しかし翌万延元年

に発行された「武蔵英名録」には、同門の高弟達と名を連ね、同年開催された府中六所宮の奉額模範試合にも出場している。

近藤勇と土方歳三の剣技の相違は、後年新

撰組に加盟し明治まで生存した、甲州出身の結城無二三が、「近藤の剣は正規に修練した立派な剣技だったが、土方の剣は人を斬る剣技だった。」

と語り残している。

將軍上洛と浪士組

文久二年暮、十四代將軍家茂の上洛が決定された。この將軍上洛を聞き、出羽浪士清川八郎は、將軍警護の浪士募集を幕府へ建議した。幕府もこの建議を容れ浪士を募集した。

天然理心流を修め、腕を撫していた、近藤、土方をはじめ剣士一同は挙げて参加を望み、佐藤彦五郎に天然理心流の後事を託し、上洛することになった。このおりの参加者は

近藤系の人としては近藤勇、土方歳三、山南啓介、沖田総司、井上源三郎、馬場兵助、中村多吉郎、沖田林太郎、ほかに道場に寄宿していた永倉新八、原田佐之助、藤堂平助等

で、この將軍上洛は、上り十五日、京逗留十日、下向十五日、約四十日の予定だった。文久三年二月八日浪士一行二百五十人は中山道を京都へ向け出発した。

京都へ着いた一行は壬生の郷土の家へ到着したが、当時の京都は、尊皇攘夷を唱えて諸国から集まる浪士が、天誅と称して殺戮を重ね、三条河原には毎晩のように生首が晒されて

いた、との記録があるように騒擾たる有様だった。ここで近藤、土方は一門のうち長男と妻帯者は、意見の相違から袂を分った清川八郎等と帰郷させ、京都に残留した同志(十三人、十四人、十六人、二十四人の諸説があ

る)は、伝手を求めて、京都守護職松平容保公に働きかけ、京都市中見廻りを命ぜられ、壬生浪士、又は精忠浪士組と称して、京都市中の浪士取締りに当たった、同年八月の政変のおり正式に新撰組と稱へ出陣した。

新撰組は在京五年間のうち文久三年の八月の政変、同二十三日、三条緋子の戦、元治元年六月の池田屋事件、同年七月の禁門の変、慶応二年九月の三条高札事件等にあたり、特に池田屋事件は、明治維新が一年おそくなつたとも、早くなつたとも云われる大事件で、風の強い日、京都御所の風上から放火し、天皇を長州へ移御するという浪士達の計画を、事前に阻止したと伝えられている。

(次号に続く)

『敬墓の道』考

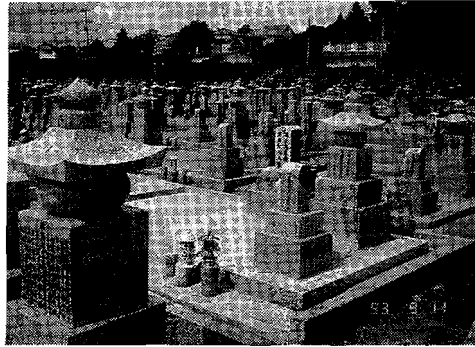
早稲田に在学していた昭和35年頃、私は同好会「相学研究会」に所属していた。その縁で今、月に二〜三回、先祖供養と報恩感謝の為、飯能まで墓参りに出かけている。

「相学研究会」は家相、地相、墓相、印相、姓名、人相等あらゆる面からものの相を考察、研究する会であった。特に墓相に関しては、卒業後も、放送記者時代には国葬で青山墓地、皇族の葬儀で護国寺墓地、又は多摩霊園等々取材の機会がある度に周辺の墓を特と

拝見したり、あるいは折にふれて関係書籍を読み漁ってきた。

その結論として、人間の幸福は墓相に深い関係があり、墓の相のように家となる。墓相は極めて神秘的である。つまり、墓は生きており、墓によって家運が定まると確信するに至った。

墓は単に死者のホネ置き場やホネ捨て場ではない。相学から云えば、実に家の根である。墓相とは建立順序、方角、日光、広さ、



吉相墓群

石質、地形、水流、戒名、文字、土質などを総合的にみて、家運即ち、夫婦円満、家族健康、相続人安定、逆縁なし、金銭安定、家が代々続くなどの繁栄を計るもので、死者がなくても墓がないのは家運不定と観る。墓は生きもの、魂魄があるものとして扱う。従って、展墓、墓参では花、香、水を供え、経を唱えて回向する他、石塔の色、土の具合、水

の流れ、日の光など墓を見守るルールを心得ておく事が大切である。

逆相凶相の墓でも無いよりは良い。墓参を絶やさないと家は繁栄する。つまり、墓参こそ『敬墓の道』の第一歩なのである。『墓をもつ者。持たない者。信じない者。』そのいずれが子々孫々にわたって家運隆盛するのか歴史が教えている。

墓なきは家滅び、墓あるもその建て方、良ろしからざれば、その家枯れる。墓止しければその家、隆盛、継続す。

(文化放送社長室長)

(39・教) 工藤 英雄

草野球の生涯現役

日野市軟式野球連盟に「ユンゲル」というチームがある。今から二十年前に「トマト」という名で出ていた。名前が可愛いせいか日野市の大会でも一回戦で常に敗退していた。職業も多種多様で四十才代が多くを占めていた。当時の監督は出版社の編集長でいつも自分はトップバッターで、打たれても、打たれてもピッチャーを続けていた。その監督が事情で日野を離れることになり、監督を私がやることになった。監督兼選手となり、強いチーム作りに着手していった。幸い当時のロートルも体力がついていかなかったり、チー

ムも少し若がえった。新陳代謝がはかられた所で、名前も「トマト」から「ユンゲル」に代えた。ユンゲルは独語で英語のヤングと同じだ。タモリのユンケルドリンクとよく間違えられるが全く関係ない。実はこの名前は早稲田時代の気の合った仲間7名の会の名称である。余談だがこのメンバーは一生の友として今でも青春を謳歌できる気の置けない仲間である。名前の由来に関してはチームの誰も知るよしはない。

さて、「ユンゲル」を率いて十五年になる。私は中学から野球を続けているから三十年代。選手兼監督として時にはピッチャーもやる五十五才の現役である。チーム成績は数年前、準決勝まで勝ち抜いたことがあるが、最近は一、三回戦で敗退している。最年長は五十七才でチームの中心バッターである。チームの年令も四十四、五才が中心になってきているが、若いチーム相手なら勝てる自信がある。私は多趣味だが、野球程楽しいものはない。監督をやって一番腐心することは、試合当日十三、四名がグラウンドに集まってきた時だ。野球は9名でやらねばならない。先発メンバーを決定した後、いつ交替させるかが、一番神経を使う。私はどんな時でも、全員ゲームに出すことを鉄則にしている。折角の日曜日に出てきて、応援だけで帰すほど忍びないことはない。だから選手はいつか出し

てもらえると思っっているので、ベンチで横を向いてふてくされたような顔をしている選手は誰れもない。しかし監督の胸の内は勝ちたいのに選手を交替させねばならない辛さ。しかし、まさかの打者がヒットを打って追加点が入った時の喜びと感動。チームが勝って全員が野球が出来てその後のビールのうまさも格別である。これが草野球に情熱を注げる原動力である。多くの仲間とスポーツを楽しむ源である。

私自身いくつまで野球を続けて行くのか分らないが、生涯現役で通し、現役を退める時が、監督を退める時だと思っっている。

野球を楽しくやって、日野市の先輩や、後輩にたくさん逢うことができた。そして野球を通じてこの町がひどく好きになったことも大きな収穫のひとつと思っっている。

(40年・経) 小笠原 豊

三度目の ホールインワン

平成七年十一月二十六日、三度目のホールインワンとなった。コースは関越道花園ICから十分程の美里カントリークラブアウト八番であった。このホールは打ちおろし一〇

m、手前に池がありややアゲンストで、同伴者がピン手前約四mにオン。勿論ニヤピンが

かかっている。いつもなら八番アイアンで振るところだが7番に持ちかえた。ボールは同伴者のボールより内側にオン、ニヤピンはただきと喜んだ途端すーっと消えたのでした。“やった”という気持ちでした。

一回目は昭和五十年三月一日、大熱海国際カントリークラブ大仁コース十一番一四二ヤードを五番アイアンで打ったものでした。ゴルフを始めたのは昭和四十八年二月でしたから約二年後でありました。今では五番で二六〇ヤードをねらうのでいかにつたないスイングだったことか。

二回目は昭和六十三年四月二十九日中央都留カントリークラブ十二番一九八ヤードを三番アイアンで達成した。同伴の友人の意見では約一八〇ヤードであろうとのことでした。

この時は虫が知らせたのかニューボールをおろした直後のことであった。以来シヨートホールはできるだけ新しいボールで打つよう心掛けています。記念に残るものです。

ひところはシングルまじかまで行ったものですがシニア杯予選通過が目標という昨今です。

中部銀次郎さんの言われる“ゴルフは練習を重ねるしか道はない”を実践して行きたいと思っっております。

(23年・専政) 森田 治夫

メディア随想

ある日、日野稲門会から一通の手紙が届きました。開けてみると、中から緑野線の入った紙が出てきました。まだ、こんなものがあるんだなと懐かしく思いました。

というのは、私が原稿用紙を使用していたのは高校生までで、早稲田時代は、理工学部に行ったこともあり、A4版のレポート用紙に親しんで(?)いたからです。毎週、実験や演習のレポート提出があったのです。三年生の時が最も多く、毎週、最低三通はあったと記憶しています。

そのような三年間が過ぎる頃、研究室への配属が決まり、各人が一台のコンピュータを使用できる環境に恵まれました。

それから、ワープロの存在が身近なものになり、それを「考える道具」として使うことを覚えると、次第に、自筆で字を書くことが少なくなりました。

今、私は、社内SEとして十年目を迎えています。入社した頃は、メインフレームによるシステム構築が主流で、プロプラ系のSEとしての教育を受けました。

ところが、ここ数年の間に、ダウンサイジングやオープン化の波が押し寄せ、システム作りも大きく変わってきています。

自分自身も、二年前に、初めて、EWSと

PCを使ったオープンシステムを構築しました。従来の汎用機と端末を使うシステムと比べると、同じコンピュータを使いながら、システムの開発手法が異なり、戸惑いながら開発作業を進めていきました。幸い、今では、順調に稼働しています。

その間、社内では電子メディア推進の動きが活発化して、社員に一人一台のPCが与えられるようになりました。電子メールの利用が日常化しています。

最近では、Webサーバ、イントラネット、データウェアハウス等、今後も発展を続ける情報技術に遅れをとらないようにしたいと思いつつ、日々を過ごしています。

(62年・理工) 倉橋 裕紀

夏のもみじ

六月初旬に、私は初めて夏の京都を訪れてみました。旅のコンセプトは“気ままな独り旅”。社会に出て四年目を迎え、様々な場面で人と関わる機会も増えていきます。忙しくも平凡な生活を送る中で、“少しのんびりしたいな”と純粹に感じていたのです。ですから特に旅の目的というのはありませんでした。ただ時の流れを気にせずに行きあたりばったりの旅を遂行することで、思いもよらない発見ができたとしたら、それはちょっとした心

の貯金になるのではないかと、どこかで期待していたのかもしれない。

実際、私の心を描いたものは、夏のもみじ、

でした。寂光院の細い参道には、木々がアーチを成し、緑の濃淡が何ともさわやかで、それまで気になっていた長袖のシャツが不思議と気にならなくなっていました。私はこの緑にある種の個性を感じたものの、その理由について特に気にとめようとは思いませんでした。しかしその後三千院を訪ねて、また同じように個性的な緑を感じたのです。今度は心と目でよく観察してみると、気になっているのはどうやら、もみじ、なのです。

夏のもみじは涼し気な明るい緑色で、その色は他の木々の緑と美しく調和し、しかも全体にリズムを与えているように思えました。そして楚々としたもみじの葉は、程良い木洩れ日を提供しているようでした。

もみじは、秋の紅葉という舞台で、決まって主役の座についています。そんなもみじも夏では必ずしも主役というわけにはいきません。しかし私の感じた夏のもみじは、他の木々とうまく溶け合いながらも際立った姿を見せていました。しっかりと自分の個性を主張していたのです。

人生、どんな時でも自分らしさを大切に、自信を持って生きて行けたらすばらしいと思います。私は夏のもみじから大きな勇氣

をもらったような気がしています。

(平3年・教) 朝日 寿子

「3142」

一九七四(昭和四九)年三月初めのこと。

屋下がりの文学部キャンパスを私は重い足取りで歩いていた。

「合格者の喜ぶ姿を見るのはもう結構。不合格は午後ひっそりと確かめれば良い」。

発表は早稲田大学第一文学部を残すのみ。それまですべて不合格。自信はもはや全くない。

掲示板前で繰り広げられる悲喜こもごもの情景は、予想通り、午前中で終わっていた。人影ももうまばら。「(合格者への)封筒なしで帰っても格好は悪くなさそうだ」。

その数分後、私は地獄から天国へ一気に駆け上がった。3142、たった四つのこの数字を何度確認したことか、掲示板の数字と受験票の数字を、一つづつ、頭を上げ下げし、

何度か何度も見合わせた。どう否定しようとしても、私の受験番号がそこにある。だが、どこかに落し穴があるはずだ。半信半疑で手続きに行った私に対し書類を繰りつつ係員いわく「よく見てきたの」。

「しまった。やはり間違いか」と大慌てで

逃げ出そうとしたその瞬間、「おめでとう」と「封筒」が手渡された。身体中の血が逆流するとは、この時のことを言うのだろうか。以来二年、二度とない(妻にプロポーズされた時だ)。

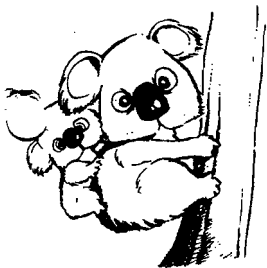
私を現役で早稲田に入れてくれたこの受験番号は今、私の大切なシークレットナンバーとなっている。

「蛇足①」現在、神奈川県厚木南高校(定時制)教諭。今春、一四年間勤務した県立相模原高校という「進学校」から、インドシナ(ベトナム・ラオス・カンボジア)難民子女の通う同校へ移る。公務外で「インドシナ難民の明日を考える会」を主宰(代表)。神奈川県在住の難民へのボランティアを募集中。

川「蛇足②」昨秋「太平洋戦争海軍機関兵の戦死」(明石書店、¥二〇六〇)を出版。直接永瀬から¥一七〇〇(Ⅷ八一・八四六〇)。

ご協力をお願いします。大変あつかましい「蛇足」二つで恐縮ですが、同窓のよしみで平にご容赦のほどを。

(53年・日本史) 永瀬 一哉



編集後記

皆様校友の情報誌ですので、ご提言、ご意見など何なりと結構です。随時のご投稿を待ちしております。

編集担当

(祖母井美章・河谷晶子・高橋弘一)

総会・懇親会のお知らせ

〈第一部〉総会

日時 96年10月13日(日) 11時30分から

受付は11時から

場所 杏花飯店

(JR豊田駅北口京王ファミリーユ3F)

会費 7千円(年会費は別に2千円です)

〈第二部〉講演会(12時から)

講演 「多摩動物公園へようこそ」

講師 多摩動物公園 副園長

(どうぞご期待下さい)

〈第三部〉懇親会(1時から)

※なお、96年度の年会費のお振込はお早めにお願ひします (事務局)